

感染症診断に必要な知識を学びたおせ！

～感染症診断のトリセツと検査～

◎中西 雅樹¹⁾

京都岡本記念病院 感染症科部長・感染管理対策室室長¹⁾

感染症診療は、画像や培養といった検査結果のみに依存するものではなく、「なぜ今この患者に感染症を疑うのか」「どの検査を、どのタイミングで選択すべきか」といった臨床判断力と総合的な視点が求められる分野である。診断の手がかりは、病歴聴取や身体所見、さらには検査所見の細部にまで散在しており、それらをいかに拾い上げ、論理的に結びつけるかが、診断の正確性を大きく左右する。

本講演では、「感染症診断に必要な知識を学びたおせ！」というタイトルのもと、感染症診療の現場で実際に活用できる知識および検査の使い方に関する要点を、臨床検査技師を主な対象として解説する。前半では、感染症診断の出発点である病歴と身体所見に焦点を当て、発熱、皮疹、咳嗽といった非特異的な症状から、どのように鑑別診断を広げ、感染症としての妥当性を見極めるかを論じる。渡航歴、職業、動物との接触歴、医療機関受診歴など、診断のヒントとなる情報をどのように引き出し、評価すべきかについて、具体例を交えながら解説する予定である。

後半では、画像検査、微生物検査、血液検査などの診断手段をどのように組み合わせて用いるかについて検討する。たとえば、「CT所見が出たが臨床像と一致しない」「血液培養が陽性であるが、それが真の感染を示すのか否か」といった状況において、各検査の特性（感度・特異度、陽性的中率など）を理解しながら、結果をどのように読み解き、次の診療判断につなげるべきかを取り上げる。また、近年注目されているプロカルシトニンやマルチプレックス PCR といった新たな検査手法についても、その有用性と限界、臨床応用上の留意点を共有する。

感染症診療は複雑に見えるが、構造的に理解すれば決して難解なものではない。本講演を通じて、「診断の筋道がどのように構築されるのか」「検査結果をいかに臨床判断に活かすべきか」といった視点を持ち帰っていただければ幸いです。